

虫生湯治旅行記と

むしゅう

秋葉道

あきはみち

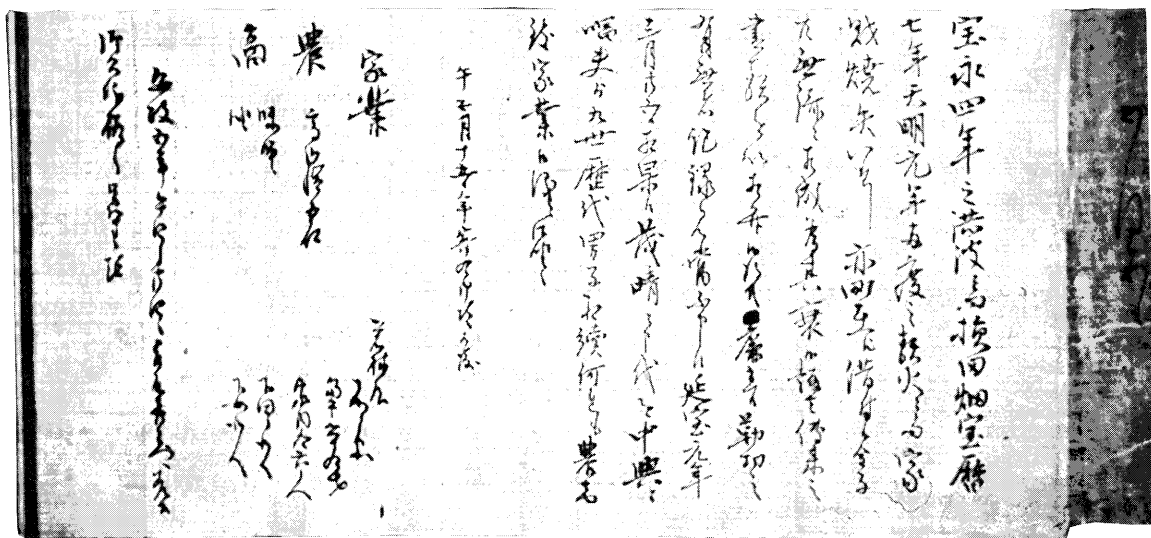
旧高須家文書

平成15年

10月21日(火)▷11月30日(日)

主催●新居町教育委員会・新居関所史料館





高須家石高人数等書上

安政五年（一八五八）五月

吉田藩は新居宿内の御用商人・庄屋・組頭・本陣・問屋・年寄・船頭頭せんどうがしらに、持高・家内人数・職種・由緒等の書上の提出を求めた。そのときの高須家の提出分。

カヘーサマと呼ばれた豪商

高須家は新居町中町に江戸初期から大正年間まで油問屋を営んでいました。当主は代々嘉兵衛又は加兵衛を名乗り、業に励み勤勉でした。

初代高須自徹は文禄四年（一五九五）若林村（浜松市若林町）に生まれ、伊兵衛と称し、新居宿城町（泉町）に住まい農商を業としました。のち城町の家を長男重信に譲って白らは中町に別家を興し、名を加兵衛と改めました。この中町加兵衛家が代々油問屋を営んだ「若林屋」で、油・味噌などを売るほか米・農作を業としました。地震や火災で家財を失い、一時家勢は衰えましたが再興、新居町屈指の豪商になりました。

高須家は通称「カヘーサマ」と呼ばれ、吉田藩の御用達を許されるかたわら主人は宿役人を務め、町民の期望を集めました。残された高須家文書は、江戸初期から明治期まで新居宿・町の政治・経済・文化に関するもので、八百点以上を数えます。



▲高須家の墓所（新居町龍谷寺）
▶若林屋のあった付近（新居町中町）



旧東海道に面し間口15間・奥行35間ほどの区画を占めた（左が関所方面）

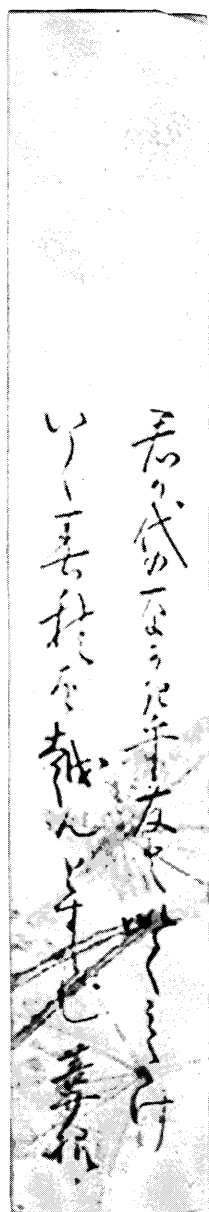
七代嘉兵衛（高須葦根）

七代高須嘉兵衛は寛政二年（一七九九）生まれ、幼名幸助。生来素朴で虚飾を好まず、長じては人を大切に、家業を盛んにする一方、開墾の事業にも力を注ぎました。文政十年（一八二七）二月より三年間、問屋の補佐役である年寄を務め、十代三百年続いた高須家の中で最も富み栄えた人物でした。また、文化面の素養も深く、白須賀宿の国学者夏目鸕鷹あしかまろに師事し、葦根と号しました。

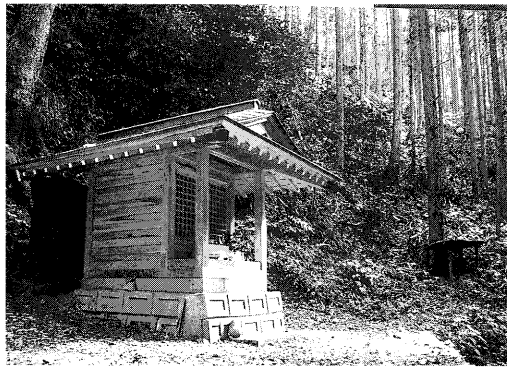
天保四年（一八三三）皮膚病（疥癬）治療のため遠州秋葉山（周智郡春野町）への参詣道沿いにあった虫生村の湯治場虫生（磐田郡豊岡村虫生）に逗留、その折多数の神社仏閣を訪れ、旅日記を残しました。

万延元年（一八六〇）七十一歳で没し、高須家の菩提寺である龍谷寺に葬られました。嫡男葦根により建てられた墓標には、葦根が詠んだ和歌が刻まれています。

七代嘉兵衛自筆の短冊



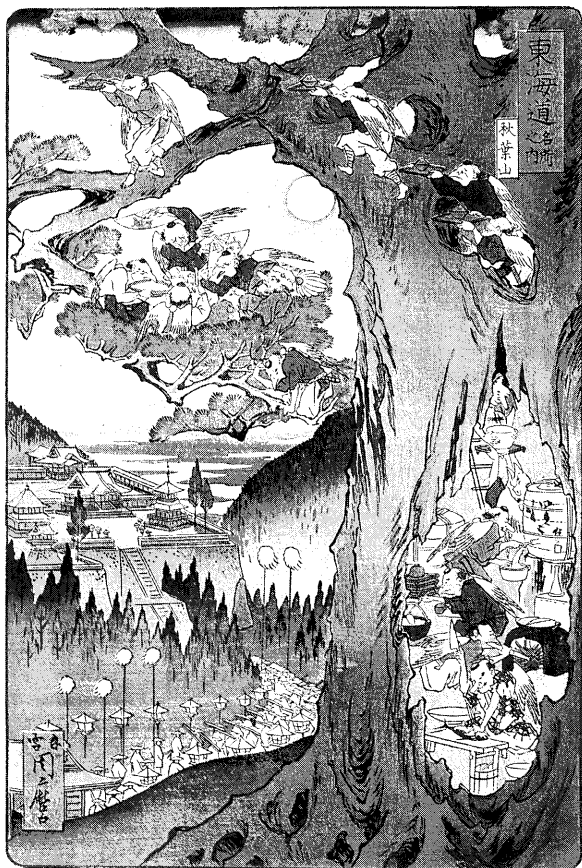
君が代のながきを友といくみだけ
いく春秋を越んとすらむ 葦根



虫生湯元の薬師如来



磐田郡豊岡村虫生のたたずまい



周磨 東海道名所之内秋葉山
文久3年(1863)



旅籠屋の面影を残す秋葉山坂下の高木屋
高木屋は江戸時代から昭和初期まで参詣者向けの旅籠を営んだ。併設の資料館に講看板など民俗資料を展示。

- 22日 温泉治療を終え虫生から峠を越えて下百古里・西川を経て光明山に詣で、犬居を経て秋葉山登山口坂下の高木屋で休憩・食事。秋葉登山道を登り、25丁目の富士見茶屋を通り、秋葉山へ参詣し、戸倉村へ下り西川村で宿泊。
- 23日 石打村・熊村・神沢・大平を経て三河国巢山へ入り、細川を経て大野で宿泊。
- 24日 門屋を通り鳳来寺山へ参詣したあと、新城で宿泊。
- 25日 野田・日下部を経て砥鹿神社・豊川稲荷へ参詣し吉田で宿泊。
- 26日 二川・白須賀を経て帰郷。

嘉兵衛は、虫生滞在中、小国神社を経由して幾度か森町へ出かけ、近辺の各所を訪れました。小国神社・虫生間は秋葉山への参詣道路、生活道路として戦前まで使われていましたが、他ルートの県道も整備されたため、現在では地元住民の利用のほかは林道として使われるのみとなりました。

磐田郡豊岡村虫生は、秋葉道沿いにあり、江戸後期から明治後期まで湯治場として賑わいました。文政十二年(二八二九)の遠州豊田郡虫生村差出帳によると、家数十三戸、これらが順番に湯治宿を担当していたようです。しかし、大正十二年(二九二二)の関東大震災を境に湯が枯れ、現在では温泉の湧き口と、湯元に建てられた薬師堂が往時を忍ばせています。

嘉兵衛は、虫生滞在中、小国神社を経由して幾度か森町へ出かけ、近辺の各所を訪れました。小国神社・虫生間は秋葉山への参詣道路、生活道路として戦前まで使われていましたが、他ルートの県道も整備されたため、現在では地元住民の利用のほかは林道として使われるのみとなりました。

遠州・東三河一巡の湯治行

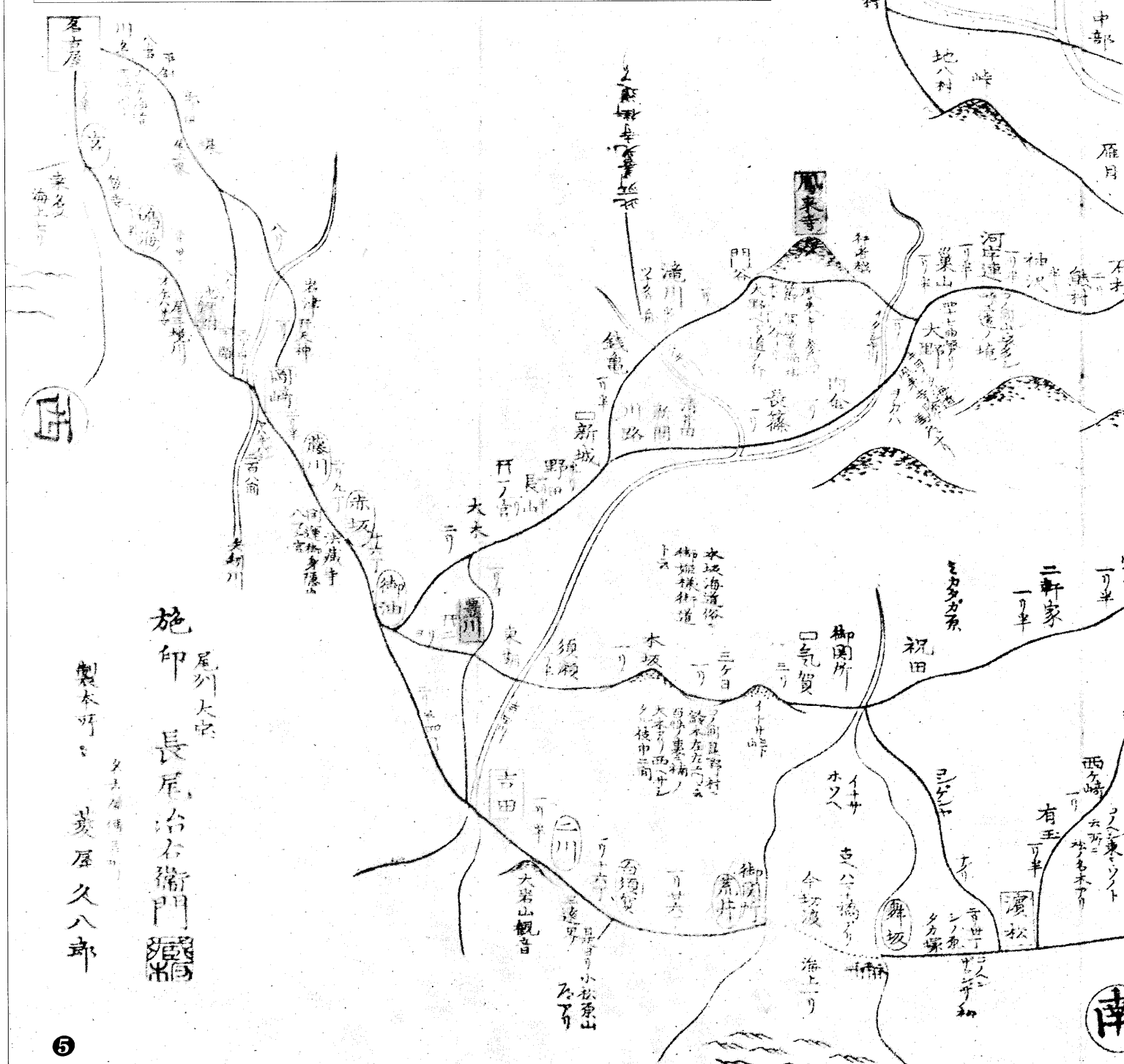
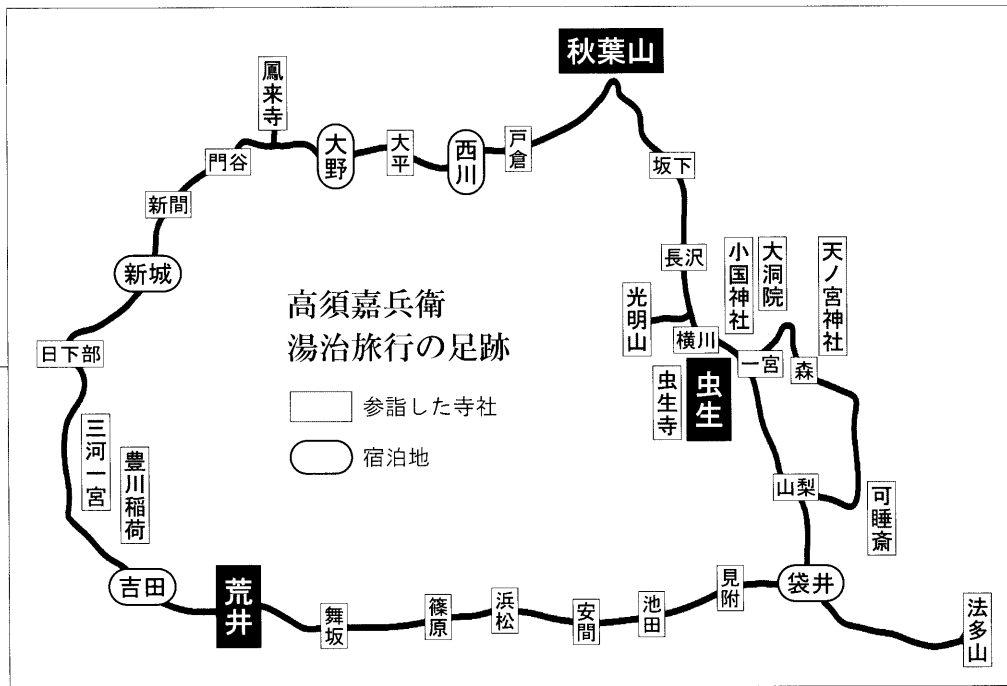
虫生湯治旅行記は、行程(次ページ参照)と天候、途中の景観、感慨などを和歌を織り込みながら綴っています。旅程十七日のうち、湯治治療には十一日があてられました。二月九日新居をたち、浜松、見附を経て袋井で宿泊、翌日法多山と小国神社へ参詣したあと湯治場虫生へ到着、その日のうちに温泉治療を始めています。

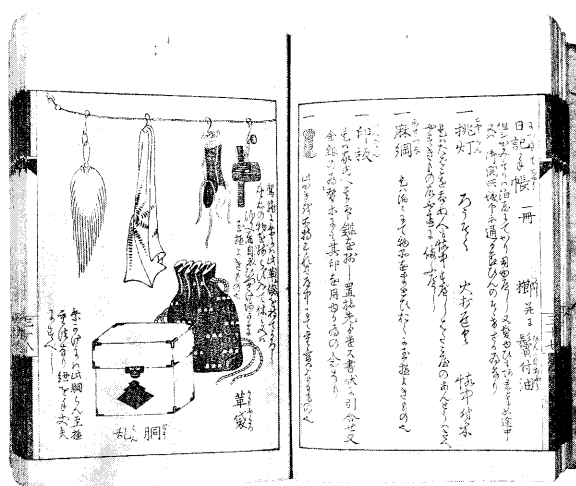
秋葉山参詣道法図

(永井宏親氏蔵)

秋葉山 参詣 道法圖

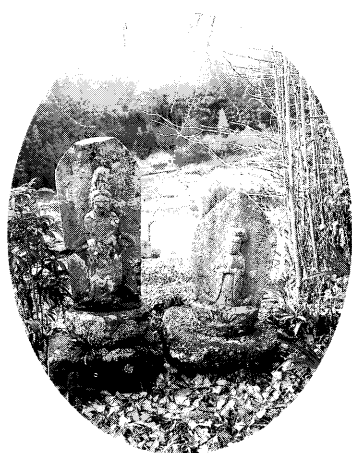






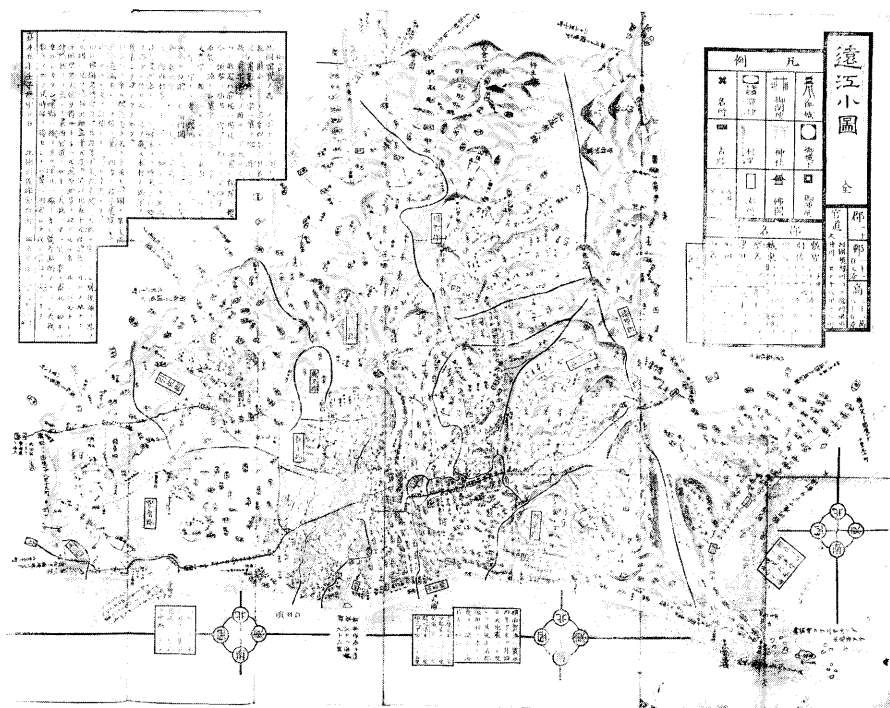
▲八隅蘆庵 旅行用心集 文化7年(1810)

◀歌川広重画 柳下亭種員著
東海道風景図会 嘉永2年(1849)



虫生寺(磐田郡豊岡村)

遠江小図 嘉永5年(1852)



浪花講定宿帳

庶民の旅・道中案内

幕藩領主は、領民の無用の移動を極力規制し、遊楽のためだけの旅は認めませんでした。しかし、例外として社寺参詣の信仰の旅と湯治の旅は許可しました。

人々は、「詣でた神仏の恵みや靈験で遊楽も授かる」と都合よく考え、信仰の旅にこそ寄せて遊楽を楽しむこともありました。

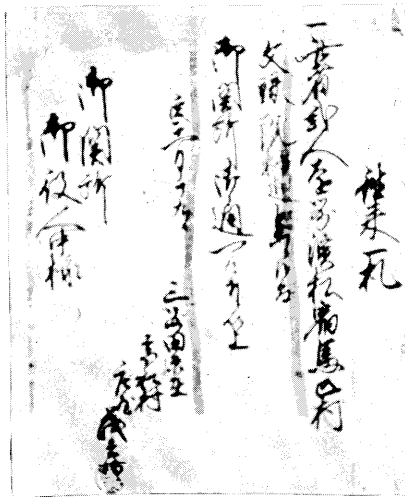
庶民が安心して旅に出かけられるようになった背景には、生活にゆとりができたことのほか、街道や宿泊施設の整備、治安の安定などがありました。

旅の情報を伝える道中記や名所図会、街道地図などの旅行案内書が出版され、庶民にも利用されるようになりました。宿賃・名所旧跡・宿場間の距離などが載っており、人々はこれらから情報を仕入れ、携えて旅に出たのです。

道中記 明暦元年(一六五五)から刊行されました。なかでも携帯できる小型サイズのものが重宝がられました。また、各種の講組織が発行した道中記は、加盟店を紹介し、道中案内も兼ねていたので実際の旅に便利に使われました。こうした案内書を目にして旅心を誘われ、わらじを履いた人も少なくなかったでしょう。

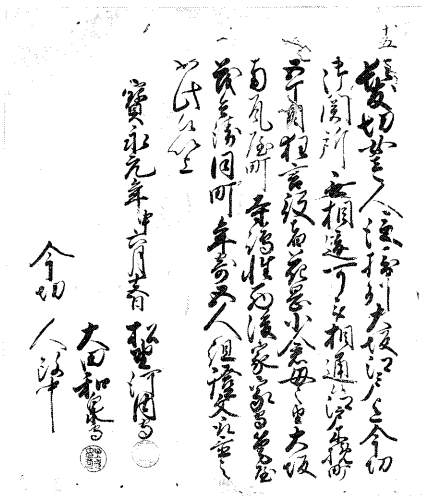
往来手形・関所手形

主人や村役人の許可を得ず旅に出ることを「抜け参り」といい、原則として認められません。旅行の許可を得るための事務的な手続きとして、村役人あるいは檀那寺で、身分証明書である往来手形を発行してもらい、女性の場合、途中に関所があれば往来手形のほか関所通行手形も必要でした。



往来手形

慶応2年(1866)11月



関所通行手形

宝永元年(1704)6月



奉願候書付覚

一私世倅十兵衛儀つゆむし二而足痛申候二付此度遠州虫生へ湯治仕度奉存候尤口数三十日程相掛り申候儀御座候被仰上
被下候様奉願候 以上
四十日
右之通弥左衛門願之儀吟味仕候所相違無御座候被為仰付
被下候様奉願上候以上
御奉行様
武右衛門 印

泉町弥左衛門の倅十兵衛
遠州虫生へ湯治の願書

新居町方記録
寛保元年(一七四一)十月

歌川豊国 東海道五十三對 阿ら井 弘化年間(一八四四〜一八四八)

東海道
五十三對



刊
江崎小嶋板

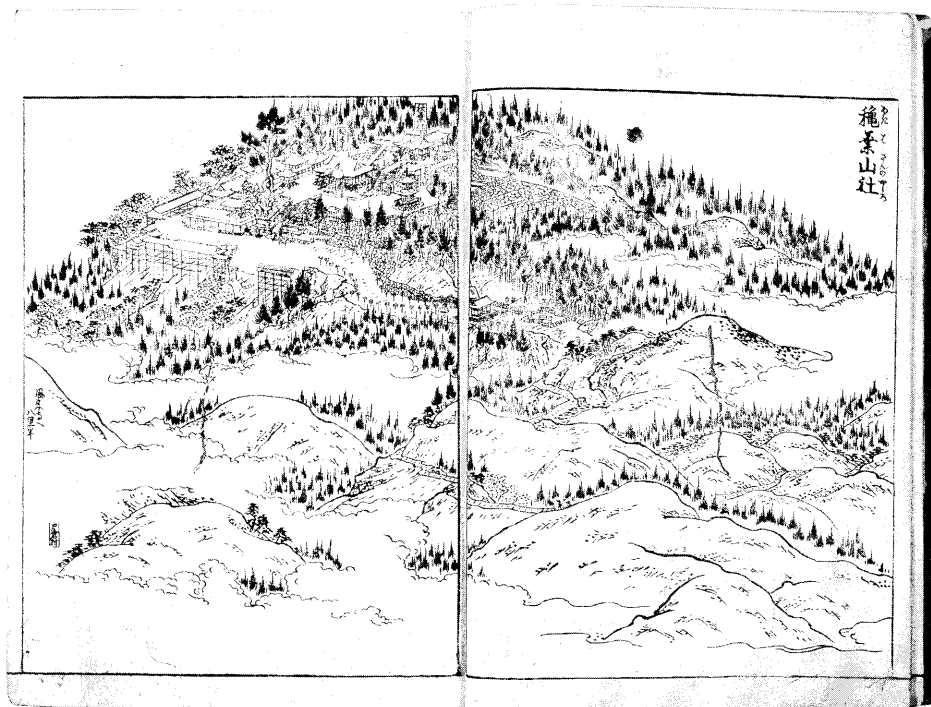
諸国道中記
文政二年(一八一九)



秋葉信仰と秋葉道

秋葉信仰は、火防の神として知られる三尺坊大権現に対する信仰で、特に関東・東海地方において江戸時代中期以降盛んになりました。秋葉山が信仰を集めた背景には、たびたびの江戸大火と秋葉修験者がその霊験を各地に流布したことがあります。貞享二年（一六八五）四月ころ、遠州各地で鉦や太鼓を打ち鳴らしなが

ら、秋葉山の御幣や神輿などを村送りする民間の熱狂的な秋葉祭が行われました。華美・盛大な秋葉祭は幕府によって同年十一月規制されましたが、上方から駿河まで秋葉信仰と参詣はさらに広範囲に普及し庶民の参詣、代参が盛んに行われるようになりました。新居町にも秋葉信仰を示す秋葉常夜燈が六カ所にあります。



秋里籬島 東海道名所図会 秋葉山全景図

寛政9年(1797)

秋葉山への参詣道が秋葉道です。遠州地方の主要街道の大部分がそれにあたり、生活の道・情報交換の道でもありました。三河国から秋葉山へ通ずる道も多く、道筋は時代とともに少しずつ変わりましたが、三河や関西方面からの参詣者が絶えず利用しました。

秋葉道沿いの集落の中には、信者

や旅人のための旅籠を営むところもでき、秋葉道のコースや旅籠名を記載した定宿帳も出版されました。多くの参詣者で賑わった秋葉道も、今では街道沿いの秋葉常夜燈や道標などが往時の面影を残すのみとなりましたが、お日待ちや代参などを行う秋葉講として秋葉信仰は今も日々の生活に根付いています。



愛知県鳳来町巢山の秋葉常夜燈



新居町船町の秋葉常夜燈

この企画展開催にあたり次の皆様のご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

高木屋資料館 高木實氏 永井宏親氏 寺田敏幸氏 杉浦政雄氏

(参考文献)

- 静岡県教育委員会『静岡県歴史の道調査報告書—秋葉道—』 ●豊岡村『豊岡村史』
- 新居町『新居町史第五巻 通史編 風土編』 ●渡辺和敏『近世交通制度の研究』

虫生湯治旅行記と秋葉道

発行：平成15年10月21日

編集：新居関所史料館